

石座神社遺跡の遺構と遺物

● 早野浩二・日吉康浩

豊川中流域に立地する新城市石座神社遺跡は、弥生時代後期・古墳時代前期の集落遺跡である。大型竪穴住居と大型掘立柱建物によって構成される集落の中心施設、検出された320棟の竪穴住居、破鏡を含む金属製品の出土などから、遺跡は弥生時代後期の拠点集落から古墳時代前期の首長居館への変化の過程を具体的に示す好適な資料と考えられる。

調査の経緯と経過

新城市大宮に所在する石座神社遺跡の発掘調査は新東名高速道路建設に伴う事前調査で、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成20年度から継続して実施している。平成20年度は丘陵東端部の5,200㎡、平成21年度は丘陵西端部の4,720㎡を調査、平成22年度は丘陵頂部の10,570㎡を調査した(図1)。

立地と沿革

石座神社遺跡は、豊川中流域右岸、連吾川と大宮川に挟まれた標高約110mの上位段丘面上に立地する。低地との比高は20～30mである。周辺の低位・中位・高位の各段丘面には同時代の遺跡が多数分布する(「雁峰山麓の遺跡群」とも呼称、図2)。同一段丘面上には10基の古墳で構成される断上山古墳群が分布し、段丘南端付近には、全長約50mの前方後方墳である断上山10号墳(図3)、石座神社境内地には断上山2・3号墳が立地している。なお、石座神社は旧設楽郡内唯一の式内社である。

遺跡の概要

石座神社遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡で、遺跡の規模は東西約300m・南北約100mと推定される。環濠は伴わず、遺跡内で墓域は確認されていない。

その他、縄文時代、弥生時代、古代、中近世の遺構・遺物も確認されている。縄文時代の遺構としては、縄文時代早期前半の煙道付炉穴6基、中期後半の竪穴住居1棟、多数の陥し穴状の土坑が検出されている。出土遺物としては、縄文土器、玦状耳飾り3点、有舌尖頭器・細石核・石匙・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石棒等の石器群がある。また、弥生時代前・中期の土器も散見される。

古代の遺構としては、丘陵東端部の緩斜面において方形区画を伴う小規模な集落が確認されている。また、丘陵縁辺には石座神社の社地を区画したと思われる古代・中世の大溝が掘削されている。中近世の遺構としては、丘陵斜面で中世前期の竪穴状遺構、火葬骨を伴う土坑、牛馬骨を伴う土坑・溝、火葬施設等が検出され、六文銭等も出土している。

また、表土直下より採集した鉛製鉄砲玉5点は、長篠・設楽原の戦いに関連する可能性がある。近世以降の遺構としては、丘陵緩斜面において炭焼窯2基が検出されている。

弥生時代後期・古墳時代前期の遺構

(1) 遺構配置

東西約125m、南北約70mの丘陵頂部平坦面のほぼ中央には、大型竪穴住居が集中する約50m四方の空間が存在する(図4)。以下、この区画を「(集落)中枢域」と呼称する。その中枢域北東側の丘陵頂部縁辺には柵列の可能性がある柱穴列が確認されているものの、それ以外に中枢域を区画する施設は明確ではない。た

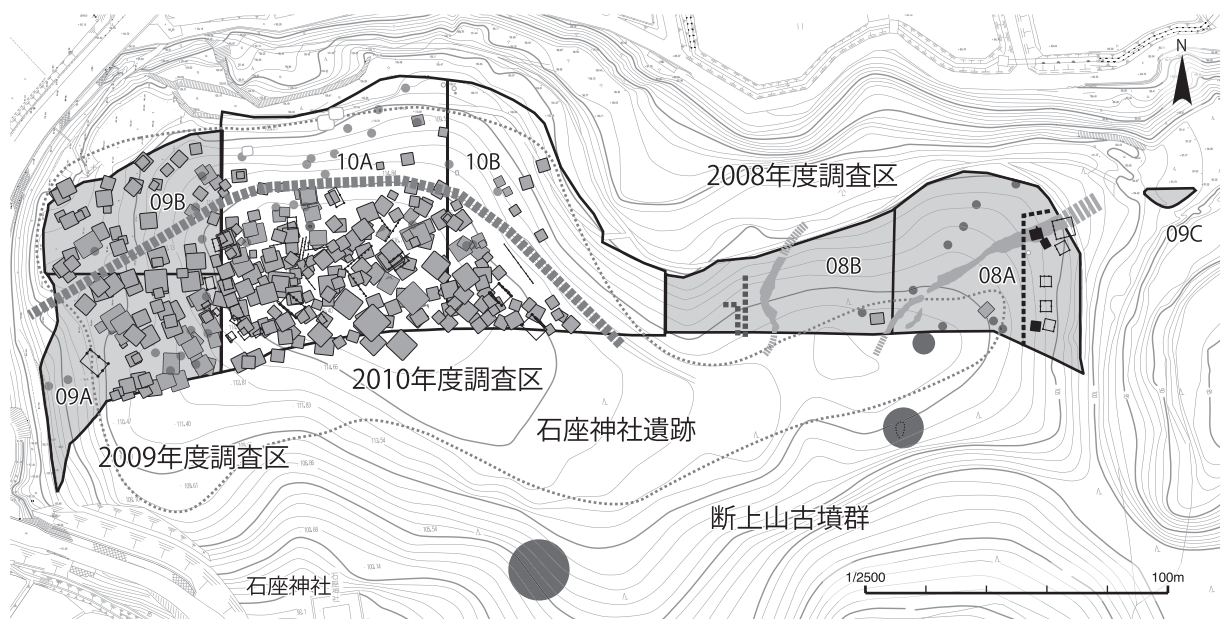


図1 調査区配置図 (1/2,500)

だ、中枢域の南西側、北西側、北東側は竪穴住居が密集し、やや散漫な中枢域内とは明らかに空間の利用状況が異なる。

中枢域の南西側前面と北東側前面には密集する竪穴住居群に混在して、布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物が配置される。さらに、南西側の大型掘立柱建物の西側の丘陵頂部縁辺には掘立柱建物が並列する。

丘陵南西の緩斜面は段状に加工され、上段・中段・下段の各段には竪穴住居が地形に即して配置される。各段の竪穴住居群は幾つかの支群に区分することも可能で、大型竪穴住居も散在する。丘陵北西の緩斜面は丘陵南西の緩斜面と比較して竪穴住居の分布がやや希薄で、丘陵北東の斜面はさらにそれが希薄となる。

(2) 集落の中心施設

これまでの調査で、集落の中心施設が大型の掘立柱建物と大型の竪穴住居によって構成されていることが明らかとなった。

中枢域南西側の前面に配される大型の掘立柱建物 3300SB は桁行 4 間・約 7 m、梁間 1 間・約 5 m の規模で、桁行の柱掘方が布掘り状を呈し、梁間の柱間が広い特徴を有する。独立棟持柱の有無は竪穴住居との重複によって不明確なお検討を要する。一方、中枢域北東側前面の丘陵縁辺には 3300SB に規模が近似する布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物 6000SB・

6100SB の 2 棟が柱筋を揃えて配される。いずれも 3300SB と同様、梁間の柱間が広い特徴を有し、棟持柱を伴わない。

大型竪穴住居で最大級の 3149SI は 9.3×9.0m の規模で、周壁に 1.5～2.0m 間隔 (コーナーのみ近接) で小柱穴をもつ壁立ち式の竪穴住居である。この周辺には、3261SI (9.0×7.8m)、3145SI (8.2×8.1m)・3150SI (7.6×7.4m)・3388SI (7.4×7.4m)・3407SI (一辺 7.2m)・3380SI (7.0×6.8m)・5634SI (7.1×6.4m) といった大型竪穴住居が集中し (3261SI のみ中枢域の北西側に分布)、大型竪穴住居は都合、床面積 80 m² 級 1 棟、60～70 m² 級 2 棟、50～60 m² 級 5 棟を数える。また、西斜面の大型竪穴住居 1276SI (一辺 7.5m)、1464SI (8.0×7.0m) を含めると、床面積 50 m² 級以上の大型竪穴住居は 10 棟前後にも及ぶ。なお、3261SI と 3388SI は拡張、さらに 3388SI はやや大型の掘立柱建物 5000SB (桁行 3 間・5.5m、梁間 1 間・3.4m) への建て替えが認められる。大型建物が継続的に占地する 3388SI・5000SB 付近には、これに対応する可能性がある柵列も認められる。なお、3407SI・3380SI も壁立ち式の竪穴住居となる可能性がある。

布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物と壁立ち式の大型竪穴住居による集落の中心施設の構成

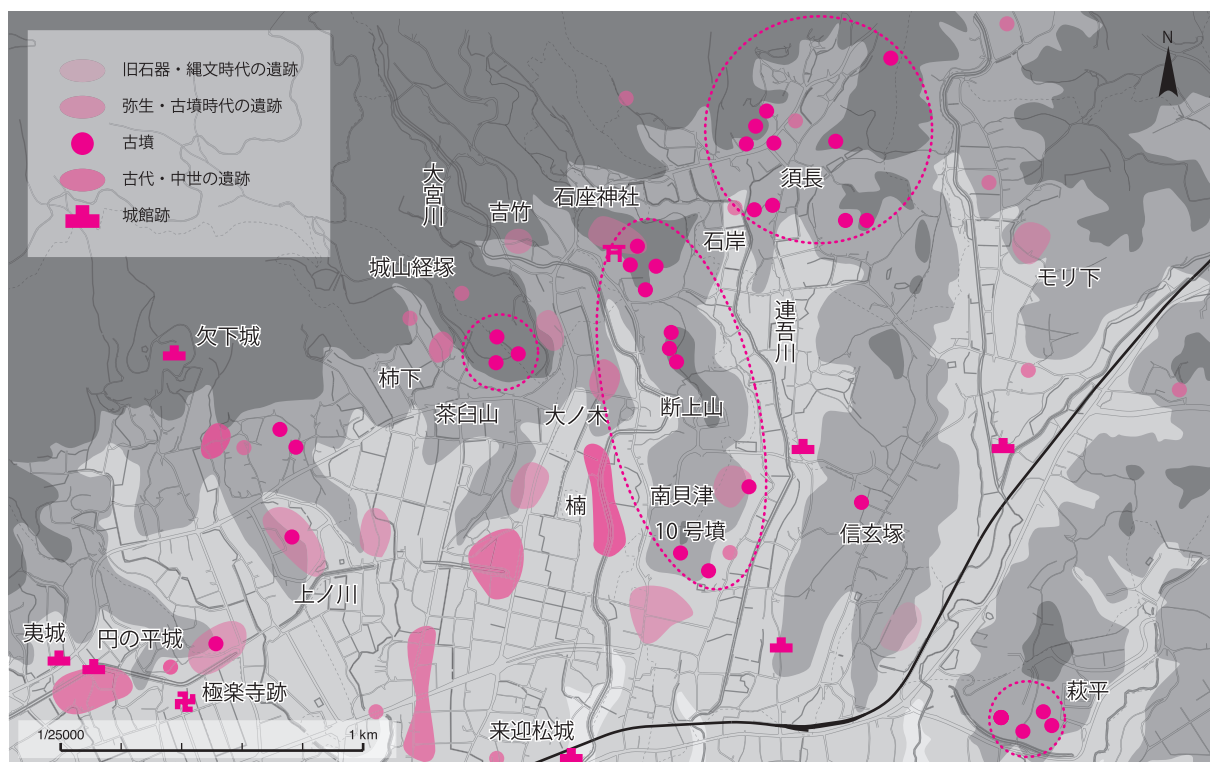


図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

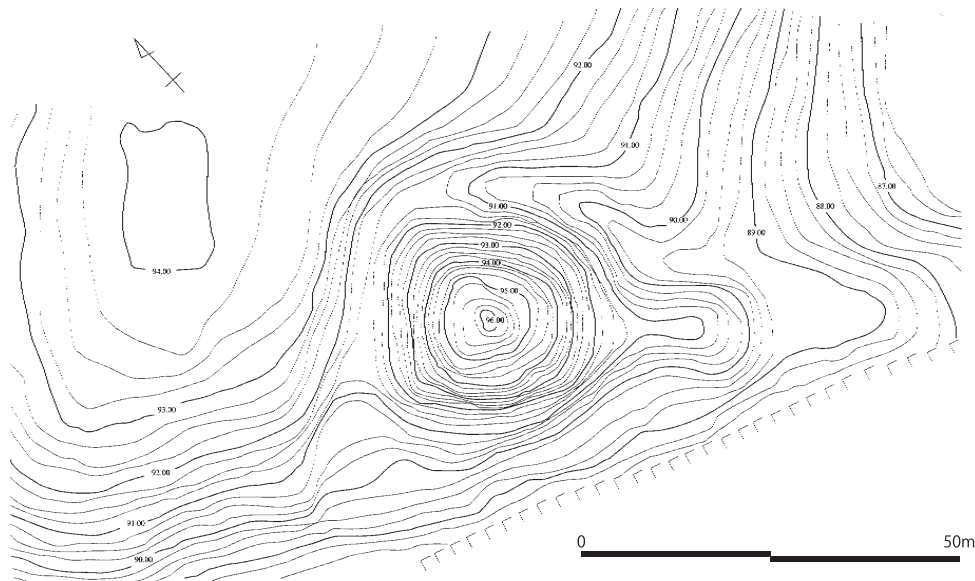


図3 断上山10号墳測量図 (1/1,000)

は、石座神社遺跡とほぼ同時期（古墳時代前期）の三重県津市高茶屋大垣内遺跡、福島県いわき市折返A遺跡・菅俣B遺跡において認められる。後述の岡山県岡山市津寺遺跡の掘立柱建物を含め、これらの中心施設は、区画施設として柵列を伴うことから、集落内で特別な位置を占めていたと推測される。一方、石座神社遺跡の中心施設を区画する施設は、折返A遺跡・菅

俣B遺跡や高茶屋大垣内遺跡、津寺遺跡と比較して曖昧である。

布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物（3300SB・6000SB・6100SB）の規模と構造は、折返A遺跡・菅俣B遺跡の棟持柱をもつ第1号掘立柱建物、津寺遺跡の掘立柱建物—54に類似する（図5）。折返A遺跡・菅俣B遺跡の第1号掘立柱建物は、桁行3間・6.2m、梁間1間・5.2mで

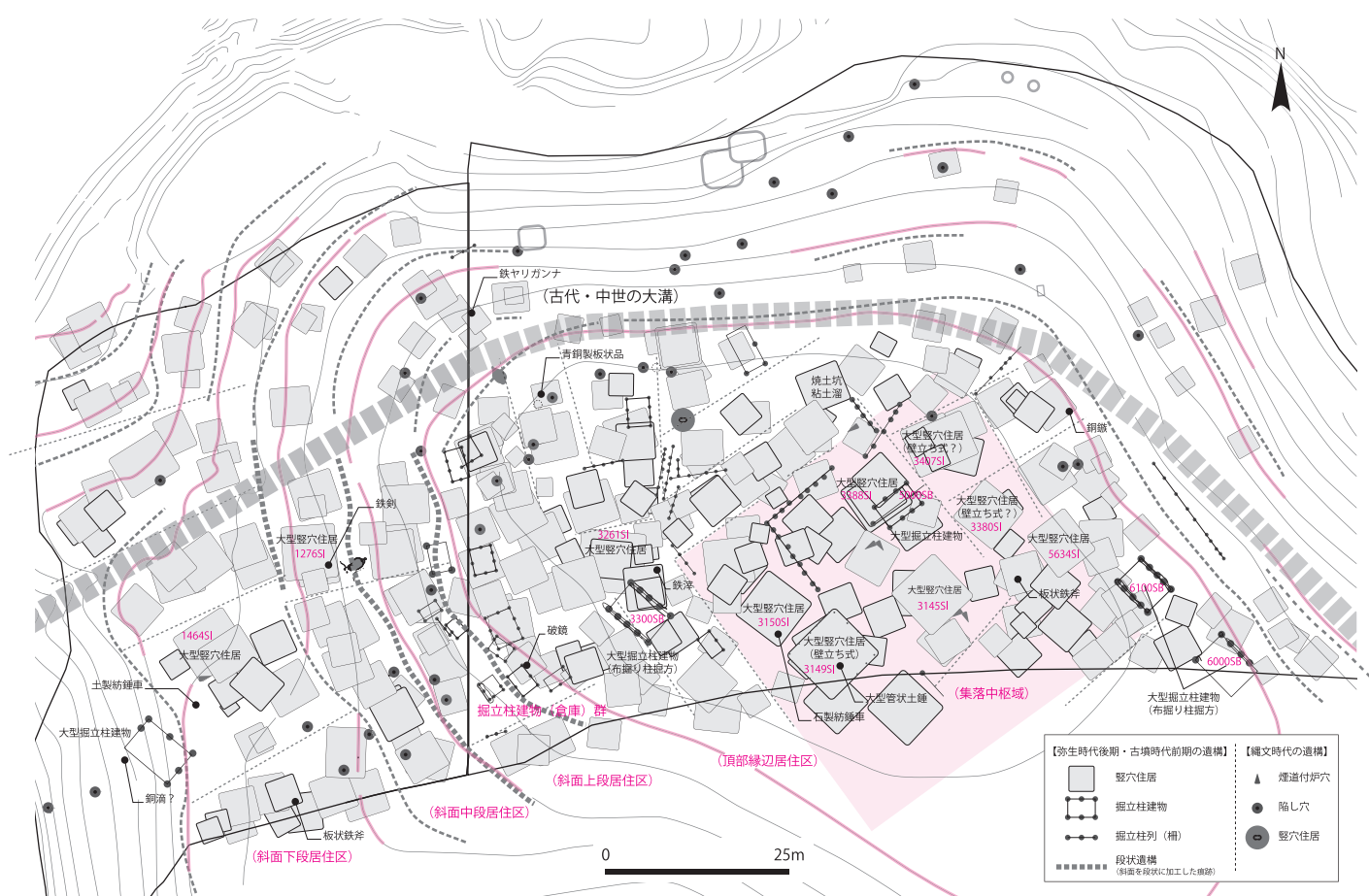


图4 主要遺構配置図 (1/1,000)

規模が近似し、梁間の柱間が広い点が 3300SB と類似するが、側柱の妻側外に棟持柱を有する点が異なる。津寺遺跡の掘立柱建物—54 は、桁行 4 間・8.1m、梁間 1 間・5.2m で同じく規模が近似し、梁間の柱間が広く棟持柱の有無が明瞭でない点が 3300SB に類似する。一方、高茶屋大垣内遺跡の布掘り柱掘方をもつ掘立柱建物 SB361・SB362・SB363 は、梁間が 2 間(以上)で、片側にのみ独立棟持柱を伴う点が異なる。規模も SB361 が桁行 4 間・8.2m、梁間 2 間以上・5.4m 以上、SB362 が桁行 4 間・8.3m、梁間 2 間・5m 以上、SB363 が桁行 4 間・8m、梁間 2 間・6.6m で、石座神社遺跡 3300SB・6000SB・6100SB と比較してより長大である。

壁立ち式の大型竪穴住居 3149SI に類似する同時期の住居の例として、折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡の第 3 号住居、高茶屋大垣内遺跡 SH249 がある（図 6）。折返 A 遺跡・菅俣 B 遺跡の第 3 号住居は、一辺 10.5m の大型竪穴住居で、周壁に 1.4 ～ 1.8m 間隔（コーナーのみ近接）

で小柱穴をもつ壁立ち式である。高茶屋大垣内遺跡 SH249 は、遺跡最大、一辺 7.5m の大型竪穴住居で、周壁の三辺に小柱穴をもつ壁立ち式である。なお、SH249 の地床炉の一つは支柱石を配するもので、同様の炉は後述するように、石座神社遺跡においても多数認められている。

(3) 竪穴住居の構成と構造

3年間の調査で、丘陵の頂部から緩斜面にかけて約320棟の竪穴住居を確認した。集落推定範囲の約二分の一を調査したとするならば、遺跡内には少なく見積もっても約600棟の竪穴住居が分布する見込みである。

南西緩斜面においては、斜面が段状に加工・造成され、等高線に沿うようにして竪穴住居が連なるように重複する状況を確認した。斜面を段状に加工した「段状遺構」には遺物が大量に廃棄され、その様態は「環壕」にも類似する。

豎穴住居の切り合いは、豎穴住居が密集する南西緩斜面から丘陵頂部において、5～7回程

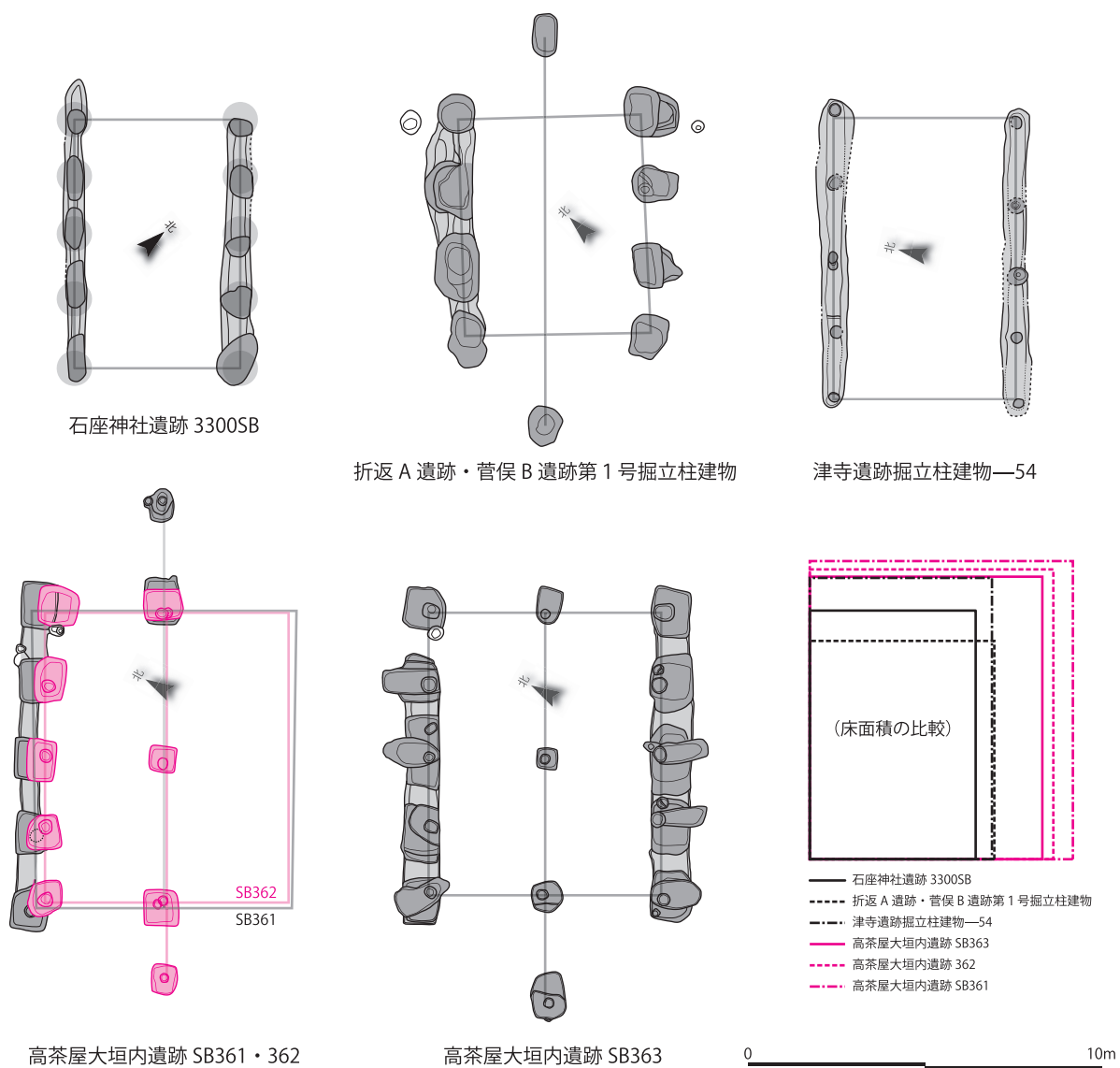


図 5 布掘り柱掘方をもつ大型掘立柱建物の比較 (1/200)

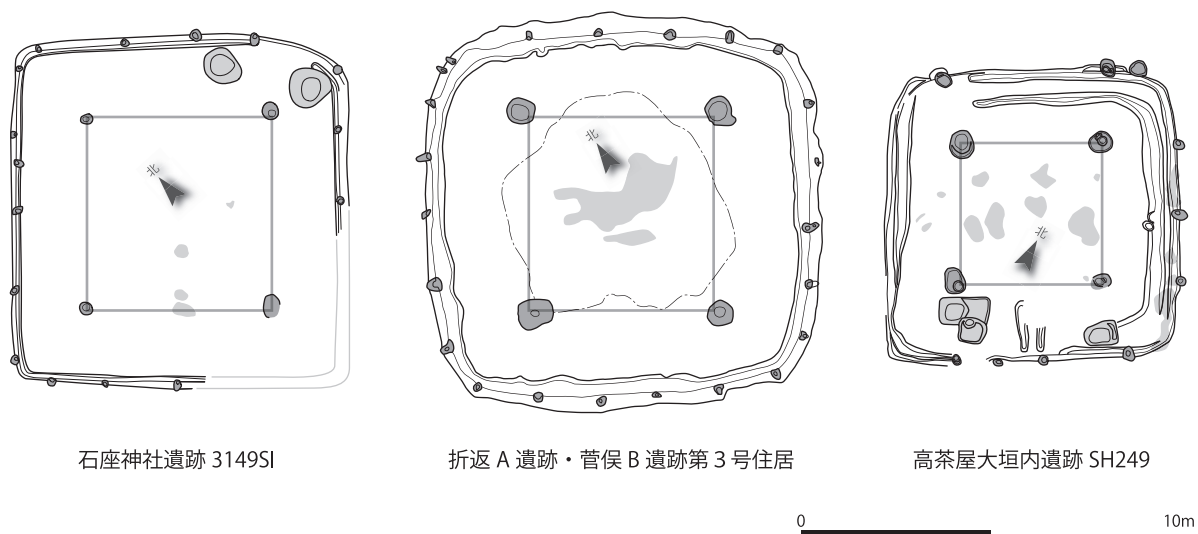


図 6 壁立ち式の大型竪穴住居の比較 (1/200)

度確認されている。よって理論上、集落変遷は10段階以上に細分される。これらの竪穴住居群は無秩序に重複することはないようである。先に述べた南西緩斜面の「段状遺構」、丘陵頂部における大型竪穴住居の集中域とその周辺の竪穴住居の密集する区域等から勘案されるように、分布域の一定の区分も可能である。

竪穴住居を規模で分類するならば、一辺が約3mの小型、4～6m程度の中型、7～9m程度の大型という3群に大別することができる。そのなかで最も数が多いのは中型住居である。規模を問わず、ほぼすべての竪穴住居に共通する構造上の特徴としては、地床炉・貼床・周溝を伴う点が挙げられる。

地床炉は支柱石を配したものや、ごく稀に粘土を貼付けたものも見られる。支柱石を伴う住居は25棟が確認されており、なかには支柱石の代わりに土器片を転用した住居1棟も存在する。なお、炉を伴わない住居は15棟が確認されている。

貼床は掘方の掘削後に整地を行い、それを叩き締めるようにして構築されている。床面全体に構築する場合と、床面の一部のみ構築する場合がある。なお、住居の掘方は幅広の周溝状を呈するものも多く、斜面に構築される住居では、斜面の低い側に整地土を入れ、平坦な床面を確保する造作も認められた。

丘陵頂部では支柱穴配置が明瞭なものも多く、4本の支柱穴を伴っていたことを容易に理解することができる。しかし緩斜面に構築された住居では支柱穴配置が不明瞭な場合が多い。その他、完形に近い土器が出土する貯蔵穴様の土坑やいわゆる「馬蹄形遺構」が住居の隅に構築される住居、粘土塊が残された住居（粘土貯蔵穴を構築する3742SIを含む）も存在する。馬蹄形遺構は地山を削り出したものと、床面に盛土して造られるものがある。

弥生時代後期・古墳時代前期の遺物

(1) 破鏡

方格規矩四神鏡を分割した破鏡が、竪穴住居3002SIから出土している(図7)。破鏡の破断面は丁寧に研磨され、懸垂用の穿孔が2孔穿た

れる。遺存状況は良好である。

破鏡は岡村編年の漢鏡5期に帰属し、型式は方格規矩四神鏡V A式である(岡村1993)。確認される「泉」の文字から、銘文は樋口隆康分類K(「尚方作鏡真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 浮游天下敖四海 徘徊神山採芝草 寿如金石為国保」)に相当するとみられる(樋口1979)。方格内の十二支の銘帯と銘文Kの配置関係から、「泉」の文字付近には白虎が配されることが多い。このことから推測すると、残存する主文の図像は右向きの白虎であると推測され、不鮮明なものの、左から白虎の尾、後足、体軀、羽、首、前足の表現が見て取れる。原鏡の類例としては、石川県羽咋郡宝達志水町宿東山1号墳出土鏡がある*。

破鏡が出土した竪穴住居は規模が4.2×4.5mの焼失住居で、構造や遺物出土状況に特徴的な点は認められない。竪穴住居の新旧関係から、遺構の帰属時期は集落の廃絶時に近いことを想定している。出土状況の詳細は明らかでなく、破鏡が竪穴住居に投棄されたか、住居の廃絶後に流入したかの判断は難しい。なお、竪穴住居出土土器に全形が判明する個体はなく、詳細な時期を決定するのはやや困難である。

(2) 青銅製品

破鏡以外の青銅製品(図8)として、銅鏃

* 出土破鏡について、岡村秀典氏よりご教示を頂いた。記して感謝する。

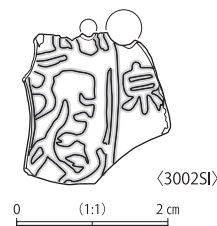


図7 石座神社遺跡出土破鏡(1/1)

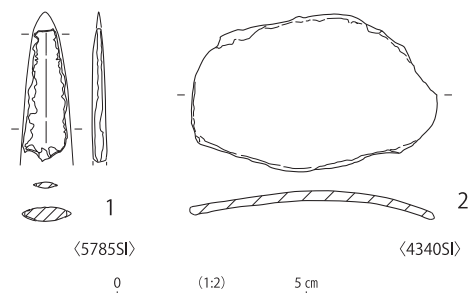


図8 石座神社遺跡出土青銅製品(1/2)

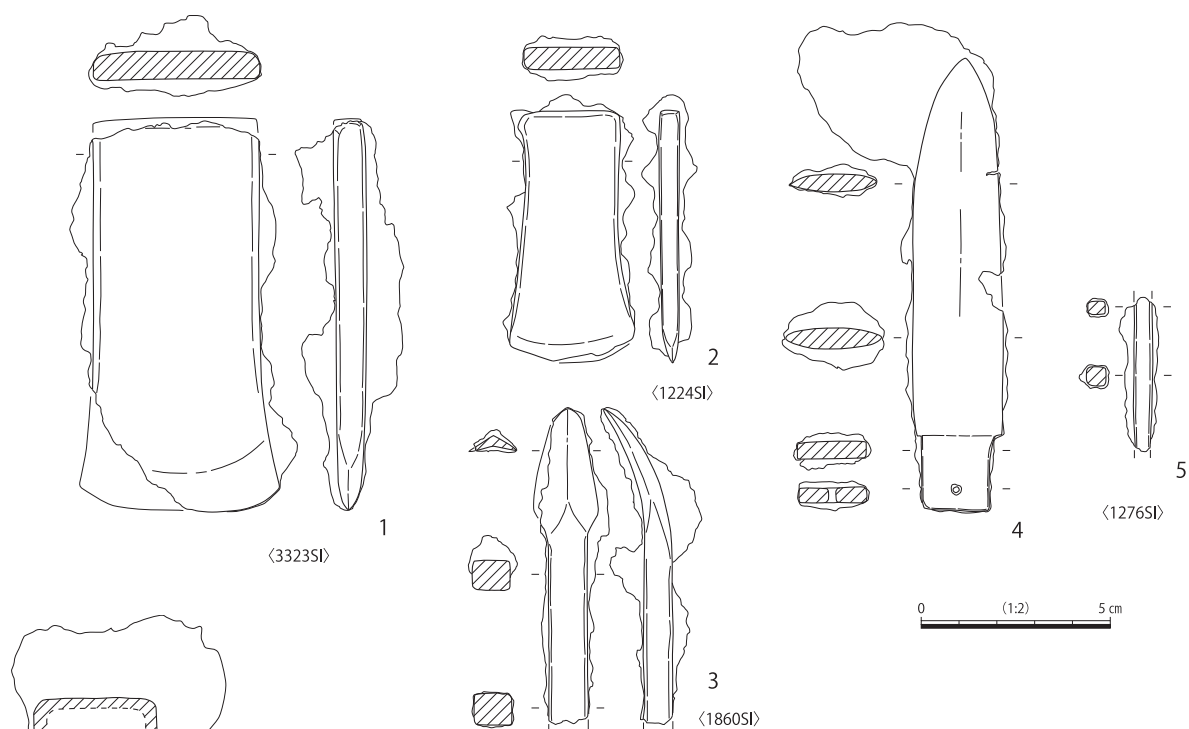


図9 石座神社遺跡出土鉄製品 (1/2)

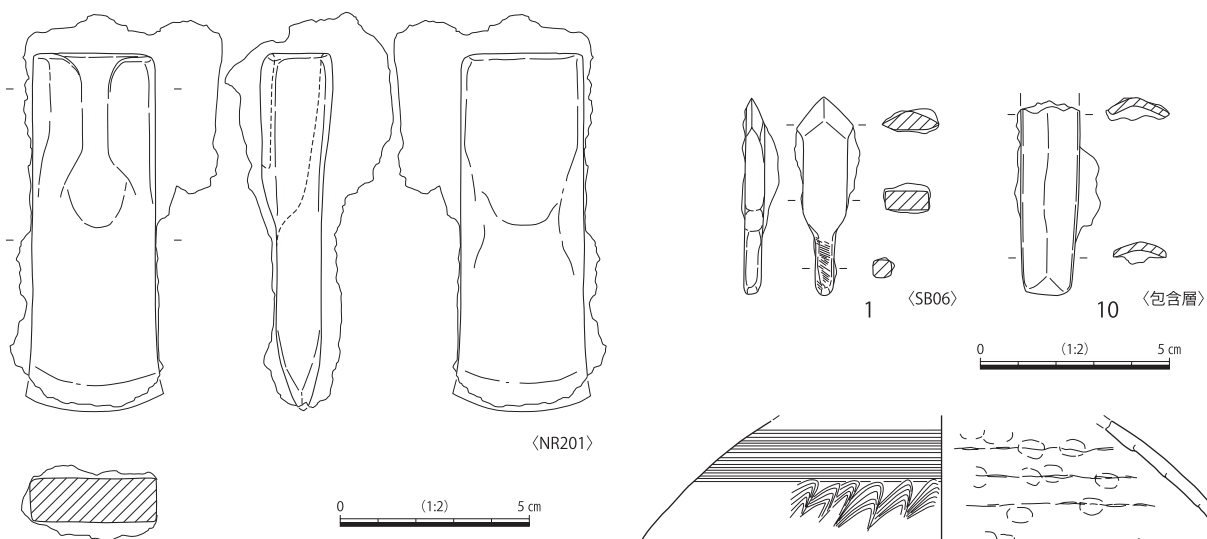


図11 吉竹遺跡出土鉄製品 (1/2)

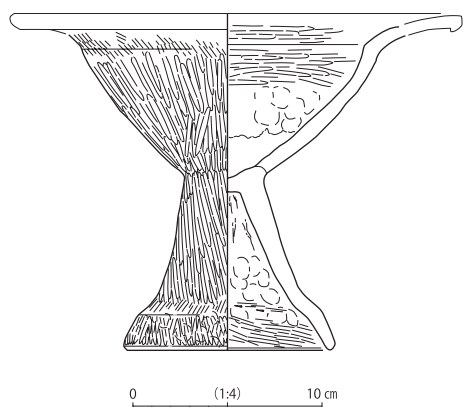


図12 楠遺跡出土菊川式土器高杯 (1/4)

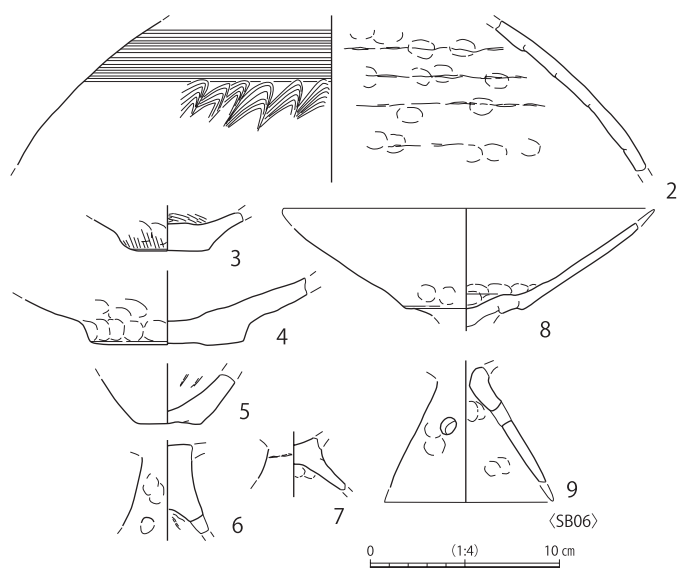


図10 上ノ川遺跡出土鉄製品 (1/2) と伴出土器 (1/4)

(1)、薄板状の青銅製品(2)が出土している。銅鏃の鏃身は長三角形を呈する。薄板状の青銅製品は、文様は認められないものの、彎曲の程度から、銅鐸の身の破片である可能性がある。

(3) 鉄製品

鉄製品(図9)として、板状鉄斧2(1・2)、鉄ヤリガンナ(3)、鉄剣(4)、棒状鉄器(5)等が出土している。これら鉄製品の出土は、同時期の他の遺跡と比較しても器種・数量が豊富である。近隣の上ノ川遺跡における定角式鉄鏃(図10-1、2～9が伴出)と身部に裏すきがある鉄ヤリガンナ(10)、吉竹遺跡における有袋鉄斧(図11)の出土等、周辺遺跡を含めた出土様相を踏まえると、当地域が金属器流通に積極的に関与していた公算も見込まれる。

鉄剣は大型竪穴住居1276SIの床面において出土した。周辺地域では東遠江地域の森町文殊堂遺跡土坑墓、磐田市梵天遺跡H地点墓・I地点墓等の墳墓に類例が認められるが、天竜川以西における分布は希薄である。鉄剣の流通を理解する際、当遺跡や楠遺跡における菊川式土器(図12)の出土は示唆的である*。

(4) 金属器生産関連遺物

青銅器生産の痕跡を示す遺物として、銅滴、先述の薄板状の青銅製品の出土がある。前者は丘陵西斜面の大型掘立柱建物前面の落ち込みから、後者は丘陵縁辺の竪穴住居(竪穴状遺構)4340SIから出土した。ごくわずかではあるが、

* 上ノ川遺跡、楠遺跡出土遺物について岩山欣司氏にご協力を頂いた。記して感謝する。

参考文献

- 愛知県 2005 『愛知県史』資料編3 考古3 古墳
 石川県立埋蔵文化財センター 1987 『宿東山遺跡』
 磐田市教育委員会 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団 2003 『折返A遺跡・菅保B遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第95冊
 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集
 岡山県教育委員会・岡山県古代古備文化財センター 1998 『津寺遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集
 新城市教育委員会 1996 『楠遺跡発掘調査報告書』新城市埋蔵文化財調査報告書X
 新城市教育委員会 1999 『上ノ川遺跡発掘調査報告書』新城市埋蔵文化財調査報告書17
 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
 三重県埋蔵文化財センター 2000 『高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告184

鉄器生産の痕跡を示す遺物として、大型掘立柱建物3300SB付近の3282SIより微小な鉄滓が出土している。

(5) その他

その他、特徴的な遺物として、大型管状土鍾2、土製紡錘車、杓子形・容器形土製品等の土製品、石製紡錘車、石製加工円板等の石製品、弧帯文?を線刻した線刻土器、底部穿孔壺等がある。

なお、他地域系土器としては、尾張系のS字甕・パレス系壺、菊川式系の壺・高杯、近畿V様式系の叩き甕等が散見されるが数量は少ない。

まとめ

集落の中心施設の構成、出土遺物の内容等を踏まえると、石座神社遺跡は豊川中流域における拠点的な集落として位置付けられる。集落の中心施設の構成は、同時期の首長居館として評価される遺跡と共通する点も多いことを踏まえると、遺跡は弥生時代後期の拠点集落から古墳時代前期の首長居館への変化の過程を具体的に示す好適な素材とする評価が可能である。また、遺跡を含めた周辺地域は金属製品の東西流通網に関与していた点も評価に値する。遺跡の消長は、同一丘陵上の前方後方墳である断上山10号墳の築造と関連していたことも推測されるが、その詳細は遺跡の変遷過程の精査を踏まえて論じることとしたい。